

# 結末の迎え方

泰然自若

お爺さんとお婆さんは小さいころからずっと一緒に居ました。田舎の山村でガキ大将だったお爺さんと、いつも無口だけれどお爺さんにくっ付いていたお婆さん。小さいころはお爺さんが何度もお婆さんをイジメては泣かせてしまっていました。山村ではいつもの風景でした。

本当はイジメているつもりのないお爺さんは、困ったように右往左往としてしまい、周りはまたかと笑いながらお爺さんを茶化しました。怒ろうにも泣いているお婆さんのいる手前、どうすべきか迷っているお爺さんに、友達は謝るように声を挙げては帰り道を譲りました。

二人きりのほうが謝りやすい、という建前ですが、皆はこっそりと二人の後を見つからないようにつけていました。

最初の内こそ双方とも一言たりとも語ろうとはせず、ただただ真っ直ぐ帰り道を眺めているだけでしたが、四度目ほどの頃合いにお爺さんが一言二言語りかけて、お婆さんがこくりと頷いた事がありました。それをしっかりと覗いていた友達が、悪そうで楽しそうな笑顔を張り付けながらその事を喋り散らかす翌日には、真っ赤になって怒るお爺さんと真っ赤で俯くお婆さんが喧騒の渦中に居りました。

子供のころは楽しかったな。とお爺さんが呟けば、いつも泣かされていましたが、不思議と悲しくはありませんでした。とお婆さんが微笑んだ。

二人はほどなくして結婚します。早いかと思いますが、十三か十四歳の時分でした。親が決めた婚姻ではありましたが、二人は文句を言わず周りも文句を言わせませんでした。

契りを交わしてから、もう七十年の年月を共に歩いてきた二人はまた、旅立つのも二人きりと決めていました。

これは、夫婦となった初夜の事。共に決め合った大切な約束でありました。

おれより、一秒でも長く生きてくれ。お爺さんが愛おしいお婆さんの顔を撫でながらも真剣な眼差しを向けて呟けば、あなたは私に一秒でも長くあなたを想い悲しめというのですか？ それはあんまりにも酷い話です。死ぬのなら、共に連れて行ってくれないのですか。と涙を溜めて想いを吐き出しました。

お爺さんは今、お婆さんと手を握り合って身を寄せています。遺書は自宅に一枚、手元に一枚。郵送で息子夫婦へ一枚。もう息子夫婦には届いている頃合いでした。

今までありがとう。とお爺さんが虚ろな瞳で呟きました。掌はお婆さんの皺だらけな顔にやさしく触れています。

こちらこそ、楽しい人生をありがとうございました。とお婆さんは瞼を開けず、呟きました。

睡眠薬を飲みました。練炭を焚きました。思い残すこともありません。

二人は笑いながら、この世を去りました。

遺言には財産の半分を一人の孫に託すと記されていました。書かれていた名前の孫は、その話を聞き、遺言を読み、ただ泣くことしかできませんでした。

誰しものが、お金を欲します。お金があれば大抵の物品を買う事もできますし、サービスも受ける事が出来ます。だから、お金を欲する事が悪いわけではありません。それでも孫は苦悩する日々が続くことになりました。

親族の誰しものがお爺さんとお婆さんの自殺する理由を知りませんでした。おしどり夫婦として誰もが認める夫婦でしたから、自殺する理由に検討がつかないのです。だからこそ、号泣した孫の姿も、本当に大好きな人が亡くなったからだと思われておりました。

本人は胸中を吐き出すことも出来ずに苦悩していきました。

どうして何も言ってくれなかったんだ。と怒り狂い、自分の責任ではなくお爺さんとお婆さんの責任だと思いこむようになりました。そうすることによって、少しでも自責の念から逃れたかった。その一心でひたすら故人を憎み続けました。

孫は二十代の働き盛りでした。ですが、お爺さんとお婆さんの自殺から孫の生活は一遍しました。環境が変わったのではなく、見る世界がまるで違うのです。異世界へ飛ばされてしまったかと思うほど、今までの日常が酷く間違っていると感じるようになりました。

辻褄が合わないジレンマに苛まれながらも、お金のために孫は仕事に没頭しました。仕事だけが唯一、普遍的なものだったのです。

ひたすら仕事を続けてはへとへとになって家に帰り、風呂に浸かって酒を飲み、後はただ床に入れば明日が訪れる。何度も何度も繰り返していく生活でしたが、難なく身体は順応していきました。

次第に憎しみが緩和されていくと、孫は徐々にでしたがお爺さんとお婆さんの自殺前へと戻って行きました。

気づけば三十歳を乗り越え、仕事では昇進もして結婚を考える相手にも恵まれました。順風満帆、と言っても良い人生を歩むようになると、お爺さんとお婆さんの事を孫は忘れて行きました。お墓参りには行きますが、もう憎むことも悲しむことも無く、儀礼的な行事として捉え、難なくこなして行きました。

年月は流れ、歳を取ったと思い始めてからは特に死というものを身近に感じてしまうようになりました。とても恐ろしく堪らなく寂しい気分になってしまいました。

けれども、孫が生まれてからは段々とその感情も薄れていきました。今ではもう孫も大きくなり、両親を連れだつて家に来ることも少なくなりました。その事の方が、寂しかったのです。

お爺さんとお婆さんの孫は、最近になってようやく落ち着いて冷静に死というものを見据える事が出来るようになっていきます。子供は家を出て行ってから久しく、夫婦となった人は一足先に亡くなっておりました。

だからこそ、お爺さんとお婆さんの孫は怖かったのです。死というものではなく、この歳になって初めてお爺さんとお婆さんが成した事をただただ怖いと思ったのです。そして、二人がどうして自分の嘘に引っ掛かったのか——いえ、気づいていながら騙された振りをしていたのか、今になってようやく理解できてしまったのです。

それでも、お爺さんとお婆さんの孫には二人のように真っ直ぐな生き方は出来ませんでした。

お爺さんとお婆さんの孫は、別の道もあったと思えるようになっていました。お爺さんとお婆さんは悲しみに怯えつつも気丈に生き抜きました。だったら自分は臆病でも良い、楽しみながら生き抜いてみたいと思えるようになっていました。二人とは違う死への道を歩み、二人とは違う形で、誰かの心に住みたいと考えていました。

そうして、死についてではなくもっと別のなにかについて考えるようになると、どうしてもか生きるのが難しく思えてきました。いつ死んでもおかしくはない年齢になって初めての経験でした。

孫が電話越しに震える声を出して言います。会社の金に手を出してしまったと。まだバレていないから急いでお金が必要だから、出してほしいと。

お爺さんとお婆さんの孫はしゃがれた声で笑って見せました。

お前さんが悪い。素直に謝ってきなさい。警察突き出されたら粛々と刑務所で反省しなさい。なァに、五年くらいは私もまだまだ生きていますからね。出所したら、私の財産すべてを譲ってあげるから、しっかりとおつとめだと思ってやってきなさい。

しゃがれながらも妙に生き生きとした笑い声が、電話越しに孫の耳へと入り込んでいきます。

お爺さんとお婆さんの孫はとても楽しそうに笑っていました。けれども、皺だらけの顔に一筋の涙が流れると、瞳からは止め処なく涙がこぼれてきていました。

孫の返答を待たずに受話器を置いてしまっても、瞳から溢れる涙は止まることはありません。けれども、晴れ晴れとした表情に曇りは一片もありませんでした。

さあて、どうやって死のうかね。とお爺さんとお婆さんの孫は楽しそうに呟き、その前に墓参りでも行こうかね。とどこか安らいだように顔の皺を寄せつつも溜息をこぼしました。

<了>